

麻沸湯論——世界で最初の臨床麻酔の教科書は日本で著された！

土手健太郎，長櫓 巧

愛媛大学医学部附属病院麻酔・集中治療部

1. はじめに

麻酔科の専門医・指導医で華岡青洲の名を知らない医師はいないが、彼の麻酔法を記述した麻沸湯論を知っている医師はほとんどいない。麻沸湯論とは、麻沸湯による全身麻酔の方法を、青洲の一番弟子であった鎌田玄台が、門人の松岡肇に口述筆記させたものである。今回、我々は、麻沸湯論の内容が教科書として妥当であるかを吟味し、そのうえで、麻沸湯論が発表された19世紀前半の麻酔科学史の背景や著書を調べ、“麻沸湯論が現存する世界で最初の臨床麻酔の教科書である”かどうかを検討したので報告する。

2. 麻沸湯論に教科書としての十分な内容があるか？

麻沸湯論は、10ページ、約2500字、80文から成り、当時の書式で段落や句読点はない。内容から見て、1. 麻沸湯を用いた全身麻酔の術前管理、2. 麻沸湯を用いた全身麻酔導入時の要点、3. 麻酔薬の投与量と麻酔の効きにくい症例の対処法、4. 手術開始のタイミングと手術の準備、5. 麻沸湯を上手に使用できない医師のこと、6. 術後・覚醒中の注意点の6段落から成る。この6段落の中で、麻酔の適応禁忌、麻沸湯による麻酔法及び適切な麻酔深度の徴候、術中術後の管理法などを、臨床経験を基に具体的に記載しており、実際に麻沸湯で全身麻酔を行う機会がない者も麻沸湯による全身麻酔ができるように書かれている。麻沸湯論は、臨床麻酔の教科書としての必要条件を満たしている。

3. 麻沸湯論の麻酔科歴史的価値について

麻沸湯論は、外科起瘻のなかの他の疾患群の記載の前に、第一巻の本文の最初の独立した単元として記載されていることから、玄台らが全身麻酔を外科手術とは別の臨床医療の分野であると考えていたことを伺わせる。このように全身麻酔法だけを取り出して、単独の単元を作った著書は見当たらない。欧米では1800年のデイビーの笑気に関する記載、1820年のファラデーのエーテルに関する記載、1822年のヒックマンの二酸化炭素に関する記載などがあるが、これらは薬物の麻酔作用に関する記載で、実際の手術時の麻酔についてはない。欧米での、臨床麻酔の教科書としては、1846年にモートンによって書かれた冊子や1847年のスノウの著書などが最も古いとされている。これに対し、麻沸湯論は、1839年に著されており、モートンやスノウの著書よりも古く、現存する最初の臨床麻酔の教科書であると考えられる。

4. 結論

麻沸湯論は、10ページ、約2500字、80文で6段落から成り、麻沸湯を用いた全身麻酔の術前管理、導入時の要点、小児の投与量と麻酔の効きにくい症例の対処法、手術開始のタイミングと手術の準備、麻沸湯を上手に使用できない医師のこと、術後の注意点について詳細に述べられており、外科手術時の麻酔科教科書としての必要な内容を含んでいる。麻沸湯論は、1839年に伊予大洲で鎌田玄台により著されており、現存する世界で最初の臨床麻酔の教科書であると考えられ、世界的にも重要な資料である。